

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00638

研究課題名（和文）現代アートにおける創造的行為としての「食」の研究

研究課題名（英文）Research on Food as Creative Action in Contemporary Art.

研究代表者

椎原 伸博（SHI IHARA, Nobuhiro）

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：20276679

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,800,000円

研究成果の概要（和文）：2017年「文化芸術基本法」に、振興すべき生活文化として「食文化」が追加された。そのような社会的背景で、アートプロジェクトや芸術祭において「食」は重要な要素となっていた。本研究は、「食」が現代アート作品にどのように影響を与えているかについて、現地調査を行い検証作業を行った。この検証作業は、「食」の美的価値を明確にするだけでなく、高度な資本主義社会で疎外化されがちな人間に対し、創造的な「食」が「自然への敬意」と「人間性」を回復させるために有効であるという結論を導いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、現代アートの視点から「食」が有する創造性に注目し、芸術諸学（美学芸術学、現代芸術論、美術史学等）の立場から学術的研究を行ったことにある。また、文化政策学、アートマネジメント論、地域政策論などの研究者や実践者との交流により、学際的研究を目指した点にも学術的意義がある。また、2019年と2021年に公開シンポジウムを開催し、その成果は科研メンバーの論文と共にまとめ報告書を作成し公表することで社会に還元した。

研究成果の概要（英文）：In 2017, The "Basic Act for the Promotion of Culture and the Arts" has added "food culture" to the list of lifestyle culture to be promoted. In such a social context, "Food" has become an important element in Art projects and Art festivals. This study conducted a field survey to verify how "food" influences contemporary artworks. This examination not only clarified the aesthetic value of "food," but also led to the conclusion that creative "food" is effective in restoring "respect for nature" and "humanity" to people who are often marginalized in an Advanced capitalist society.

研究分野：美学 芸術学 現代美術

キーワード：現代アート 食 創造性 アートプロジェクト 味覚 多文化共生 関係性の美学 持続可能性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

2017年6月に改正された「文化芸術基本法」において、振興すべき生活文化として「食文化」が追加されるなど、食文化に対する関心が高まっていた。また、全国各地で開催されているアートプロジェクトや芸術祭では、地域の自然や風土への敬意を有し、食材への探求心と料理の技を極めるような創造的な「食」が提供される傾向が強くなっていた。それは、高度な資本主義社会で疎外化されがちな人間に対し、「自然への敬意」と「人間性」を回復させるために有効であると思われたが、そういった「食」が有する創造性に関して、芸術諸学(美学芸術学、現代芸術論、美術史学等)からの学術的研究は進んでいなかった。

現代アートと「食」に関して言えば、1930年のF.T.マリネッティによる「未来派料理宣言」以降、現在に至るまで様々なアーティストが「食」に関する作品を発表しているが、それらを総括する研究は少なかった。その流れの中で、1990年のリクリット・ティラヴァーニャの作品《パッタイ》(ギャラリーで鑑賞者にタイ料理を振る舞う作品)は、ニコラ・プリオーが問題にする「関係性の美学」の格好の事例とされ、アートの内実を作品そのものでなく、他者とのコミュニケーションの問題として把握することを導いた。この流れは、障害や経済的格差、貧困といった社会的な不正義性により排除を余儀なくされている人々に対し、社会包摂(参加)を促す手段としてのアートの流れに連なったが、その中で「食」はコミュニケーションの道具として活用される傾向が強かった。そのような状況にあって「食」が有する創造性に注目する先行研究は皆無であったため、本研究は、そのような学術研究の欠如を克服する問題意識によって構想された。

### 2. 研究の目的

本研究は、1の研究開始当初の状況を打開するため、「食」が有する創造性の特質に注目し、それを芸術諸学の視点から調査・分析する研究することを目的とした。この調査・分析は、創造的な「食」が、アートの価値観を変更しうるのではないかと「問い」の検証作業でもあった。そして、この検証作業は、「食」の美的価値を明確にするだけでなく、高度な資本主義社会で疎外化されがちな人間に対し、創造的な「食」が「自然への敬意」と「人間性」を回復させるために有効であることの確認作業でもあった。

一方、この問題意識は芸術諸学だけでなく、文化政策学、アートマネジメント論などの立場からの研究とも結びついており、本研究はそれらの研究者や実践者との交流に基づく、学際的な研究をも目的とした。そのような問題意識により、本研究は公開シンポジウムを2019年と2021年に開催し、新しい芸術の価値観を広く公衆に伝えることも目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下理論的研究グループと、実践的研究グループの二つにわけて研究した。

#### 理論的研究グループ 主たる研究領域

椎原伸博(研究代表者)	文化政策・アートマネジメント・美学芸術学
林 卓行	現代美術批評、近現代美術史
島津 京	コンテンポラリー・ダンス研究、近現代舞踊史

椎原は「食」に関する美学の文献研究を行い、美的感性論の立場から「食」や「味覚」に関する分析を行った。さらに、文化政策やアートマネジメントにおいて「食」がどのように位置づけられているかを、実地調査を踏まえて研究した。林と島津は、「食」と現代アートの関係性について、造形芸術とパフォーマンスアートの二側面から網羅的に資料収集しその分析に基づき歴史的な位置づけを行った。

#### 実践的研究グループ 携わったアートプロジェクト、芸術祭

神野真吾	WiCAN千葉アートネットワーク・プロジェクト
丹治嘉彦	水と土の芸術祭、大地の芸術祭、うちのDEアート
住友文彦	アーツ前橋が行う地域アートプロジェクト

このグループは、自らが携わったアートプロジェクトや芸術祭における「食」について先ず整理し、それらが地域社会に与えた影響を分析した。神野は、カフェとコミュニティの関係性から、さらに学校と地域の関係も視野にいれたフィールドワークを行い、その成果を分析した。丹治は主として農業を中心に、農作に基づく文化的風景と現代アートの関係性を分析した。また、新潟県越後妻有地区で開催される「大地の芸術祭」の関係者に対して、継続的に聞き取り調査を行うことで、地域で開催される芸術祭の問題点に関する考察を深めた。住友は、自らが関わった2016年の展覧会《フードスケープ 私たちは食べものでできている》で扱った事例の追跡調査を行った。そして、料理や食を、郷土や土地性の視点から分析し、「フードスケープ」という新しい価値概念の理論構築を深めた。

理論的研究グループと実践的研究グループは、それぞれの研究成果を報告する研究会を開催し、相互理解を深めると共に、学術的な精度を高めた。また、「食」に関するテーマは現代アートの領域に限定されないため、他領域の研究者を招聘し、シンポジウムや研究会を開催し、専門的知識を習得し学際的な研究を追求した。

具体的には、研究2年目の2019年、ワインに注目して「ワインは芸術や文化に何をもたらしてきたのか」というテーマのシンポジウムを開催した。そこでは、フランスやイタリアにおけるワイン生産と景観の問題について東京都立大学の鳥海基樹氏に、北海道の空知におけるワイン生産とアートを結びつけるプロジェクトについて北海道教育大学の柴田尚氏に、イタリアのワイナリー オルネライア の芸術支援活動について東京家政大学の曽根博美氏にパネル発表していただき、その後科研メンバーを交えてディスカッションを行った。

コロナ禍で2020年度の研究は十分に行えなかったが、2021年度には、zoomを活用した研究会を、5月から10月まで5回開き、そのうち4回はゲストスピーカーを招聘して行った。また、11月と12月に二回にわけて公開シンポジウムを開催し、現代美術作家の立場から、東京芸術大学の小沢剛氏、奈良県立大学の西尾美也氏、さらに文化政策研究者の立場から、大阪市立大学の吉田隆之氏をゲストスピーカーに招いて、討論をおこなった。シンポジウムは、記録集を作成し全国の研究機関や研究者に頒布した。

#### 4. 研究成果

本研究では、二回行った公開シンポジウムの記録集を作成して、その記録を公開するだけでなく、二年毎に研究成果の報告を行った。

具体的には、2019年度の間接報告書には以下の論文を発表した。

理論的研究グループとして、椎原伸博「食とアートに関する考察」、林卓行「やきそばとキャンディ」、島津京「食についての美学的議論と食を扱うアートについて」を発表した。また、実践的研究グループとして、神野真吾「食とアートにかかわる教育的プロジェクト~WiCANの事例から」、住友文彦「研究成果中間報告」、丹治嘉彦「食がアートに関わることについて」を発表した。

さらに、2021年度の間接報告書では以下の論文を発表した。

理論的研究グループとして、

椎原伸博「現代アートにおける創造的行為としての「食」について」

林卓行「関係性 の分水嶺 ティラバーニャとゴンサレス=トレスの可食的な作品から」

島津京「生きた蟹を二つに割る 食と現代美術の領分」

実践的研究グループとして

神野真吾「アートが他の領域と関わる時に必要なこと」

住友文彦「人間中心主義の克服：食をめぐる芸術実践の可能性」

丹治嘉彦「協働としての食と現代アート」である。

上記最終報告書に掲載された6本の論文の概要を述べると、理論的研究グループの椎原は、食の問題を幸福や贈与、利他といった用語から考察し、創造的行為としての「食」が有する「感性」の意味を確認した。林は継続してゴンサレス=トレスの作品について考察を行い、リクリット・ティラヴァーニャによる《パッタイ》との形式的な相違を指摘し、「関係性の美学」のなかの二様相の分離を確認した。島津は、日本各地の芸術祭の調査から、食を通じた創発的な場は、必ずしも芸術と関わることなく形成されている状況を確認した。

実践的研究グループの神野は、アートの実践の場で食を扱うことの問題点を、自ら運営したワークショップの実例から考察し論じた。住友は、ユージン・スミスや志賀理江子の作品から、食と関わる現代アートが植民地主義や人間中心主義を批判的に考える上で重要であることを確認した。丹治は、大地の芸術祭での聞き取り調査から、食が人と人とを有機的に繋がるためのツールとして機能することを再確認し、そこには民主主義的思考が重要であることを確認した。

これらの論文から、本研究の目的であった「食」が有する創造性の特質に注目し、それを芸術諸学の視点から調査・分析する研究については、「創造性」に関する問題設定の多様性が確認され、その問題意識が絶えず更新されていく状況を確認した。

また、創造的な「食」が、アートの価値観を変更しうるのではないか？という「問い」の検証作業についても、ゲストを招いた研究会や公開シンポジウムで、その多様性が確認された。しかし、調査に向いた地域の芸術祭における「食」の創造性に関して言えば、美食に関する資本主義的ツーリズムの呪縛のなかにあり、「自然への敬意」と「人間性」を回復させるために有効であると考えた「創造性」の問題意識は未成熟であると言わざるを得なかった。

しかし、椎原が指摘する「ケアとしてのアート」や「利他的センス」「アナキズム」の問題、林が指摘する「非人間的な物体=客体に主体と同等の資格を与えようとする動き」の問題、島津が指摘する「食と倫理」の問題、神野が指摘する「アートとは何か」という問いかけの再検討、住友が指摘する主体の揺らぎを通して自分たちの存在を確認する「省察性」と「境界性」の問題意識がもたらす「ポスト人間中心主義」の問題意識、そして丹治が指摘する「中動態」的な思想といった問題意識を抽出できたことは、本研究の目的的研究成果として位置づけることができるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計28件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 椎原伸博	4. 巻 1
2. 論文標題 「現代アートにおける創造的行為としての「食」について」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『現代アートにおける創造的行為としての「食」の研究 研究成果報告書』	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林卓行	4. 巻 1
2. 論文標題 「関係性 の分水嶺 - ティラバーニャとゴンザレス = トレスの可食的な作品から」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『現代アートにおける創造的行為としての「食」の研究 研究成果報告書』	6. 最初と最後の頁 30-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島津京	4. 巻 1
2. 論文標題 「生きた蟹を二つに割る - 食と現代美術の領分」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『現代アートにおける創造的行為としての「食」の研究 研究成果報告書』	6. 最初と最後の頁 36-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野真吾	4. 巻 1
2. 論文標題 「アートが他の領域と関わる時に必要なこと」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『現代アートにおける創造的行為としての「食」の研究 研究成果報告書』	6. 最初と最後の頁 42-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 住友文彦	4. 巻 1
2. 論文標題 「人間中心主義の克服：食をめぐる芸術実践の可能性」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『現代アートにおける創造的行為としての「食」の研究 研究成果報告書』	6. 最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹治嘉彦	4. 巻 1
2. 論文標題 「協働としての食と現代アート」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『現代アートにおける創造的行為としての「食」の研究 研究成果報告書』	6. 最初と最後の頁 53-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林卓行	4. 巻 1
2. 論文標題 「《ダ・ジ・パオ》のもとに グループ・マテリアルと 公共芸術 (パブリック・アート)」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『PUBLIC DEVICE 彫刻の象徴性と恒久性』 展カタログ	6. 最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林卓行	4. 巻 1
2. 論文標題 「可能性の政治 中崎透のライトボックス」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『ひかりのうつわ、ことばのにわ』展カタログ	6. 最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野真吾、縣拓充	4. 巻 42
2. 論文標題 「美術館での鑑賞教育プログラムが児童にもたらす学習効果 大学・小学校・美術館が連携した実践から」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 神野真吾	4. 巻 8
2. 論文標題 美術の鑑賞 = 感性に基づく価値判断	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武蔵野樹林	6. 最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野真吾	4. 巻 9
2. 論文標題 文脈を知らないと作品はわからないのに...	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武蔵野樹林	6. 最初と最後の頁 86-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 椎原 伸博	4. 巻 35
2. 論文標題 「水の波紋 '95」の再評価について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践女子大学美術学 = Jissen Women's University Aesthetics and Art History	6. 最初と最後の頁 15-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002176	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丹治嘉彦	4. 巻 13
2. 論文標題 ワークショップの有効性についての考察：若草パルーンプロジェクトの実践を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 85-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丹治嘉彦、橋本学	4. 巻 24
2. 論文標題 中国内モンゴル自治区との国際交流造形ワークショップの実践 子ども達の作品表現を通じたパブリックス ベースの変容について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環境芸術学会誌	6. 最初と最後の頁 58-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野真吾	4. 巻 5
2. 論文標題 色と形の曖昧さ、その危険性と可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武蔵野樹林	6. 最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野真吾	4. 巻 4
2. 論文標題 色と形を超えて見る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武蔵野樹林	6. 最初と最後の頁 76-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野真吾、縣 拓充	4. 巻 42
2. 論文標題 美術館での鑑賞教育プログラムが児童にもたらす学習効果 大学・小学校・美術館が連携した実践から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 島津京	4. 巻 315
2. 論文標題 記念碑と遺構 : 東日本大震災から10年後の震災の表象	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 専修大学人文科学研究所月報	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34360/00012392	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 椎原伸博	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 補遺 大震災とモニュメントと記憶 : アルベルト・ブッリ《クレット(亀裂)》を巡って	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『地域政策研究』(高崎経済大学地域政策学会)	6. 最初と最後の頁 73-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 椎原伸博	4. 巻 1
2. 論文標題 食とアートに関する考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科学研究費補助金基盤研究(B)「現代アートにおける創造的行為としての「食」の研究」(18H00638)中間報告(以下 中間報告と記す)	6. 最初と最後の頁 53-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 島津 京	4. 巻 1
2. 論文標題 食についての美学的議論と食を扱うアートについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中間報告	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 卓行	4. 巻 1
2. 論文標題 やきそばとキャンディ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中間報告	6. 最初と最後の頁 68-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 住友文彦	4. 巻 1
2. 論文標題 研究成果中間報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中間報告	6. 最初と最後の頁 63-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹治嘉彦	4. 巻 1
2. 論文標題 食がアートに関わることについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中間報告	6. 最初と最後の頁 77-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野真吾	4. 巻 1
2. 論文標題 食とアートにかかわる教育的プロジェクト-WiCANの事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中間報告	6. 最初と最後の頁 59-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野真吾	4. 巻 1074
2. 論文標題 美術で何を学ぶのか?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 108-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 椎原伸博
2. 発表標題 現代アートにおける創造的行為としての「食」について
3. 学会等名 日本アートマネジメント学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 椎原伸博
2. 発表標題 「ドイツにおける都市再開発事業と現代アート -BUGAゲルゼンキルヒェン1997を手がかりとして-」
3. 学会等名 立命館大学第5回風景論研究会例会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 神野真吾
2. 発表標題 社会の変化とアートの(キーノートスピーチ)
3. 学会等名 美術科教育学会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 椎原伸博
2. 発表標題 「水の波紋'95」の再評価について
3. 学会等名 美学会 東部会例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 島津京
2. 発表標題 食を扱うアートに対する観者の情動的反応
3. 学会等名 美学会 東部会例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 丹治嘉彦
2. 発表標題 造形ワークショップが学校教育現場と地域にもたらす効果について：他者との関わりから生まれる表現について他者との関わりから生まれる表現
3. 学会等名 環境芸術学会 第21回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nobuhiro SHIHARA
2. 発表標題 MONUMENT FOR EARTHQUAKE DISASTER AND PUBLIC MEMORIES. ON THE “GRANDE CRETTO” OF ALBERTO BURRI.
3. 学会等名 ICA 2019 Belgrade (21st International Congress of Aesthetics.) on July 25, 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 椎原伸博
2. 発表標題 現代アートにおける創造的行為としての「食」とは何か？
3. 学会等名 公開シンポジウム「ワインは芸術や文化に何をもたらしたのか」基調講演
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島津 京
2. 発表標題 パウハウスにおける建築と舞台の関係 グロピウス、シュレンマー、モホイ=ナジの言説を中心に
3. 学会等名 美学・藝術論研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 住友文彦
2. 発表標題 美術と食のコスモロジー
3. 学会等名 応用哲学会, 総合地球環境学研究所FEASTプロジェクト(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takayuki Hayashi
2. 発表標題 When the Artists Appear in the Film
3. 学会等名 Ecole superieure d'art Pays Basque (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 椎原伸博
2. 発表標題 シチリアの震災復興都市と現代アート
3. 学会等名 日本アートマネジメント学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林 卓行
2. 発表標題 危機の時代におけるアートの自律性について
3. 学会等名 ゲーティンステイトゥート東京 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 神野真吾
2. 発表標題 美術文化と美術の文化
3. 学会等名 国立美術館の教育普及事業等に関する委員会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 神野真吾
2. 発表標題 市街地の活性化とアート
3. 学会等名 千葉市商工会議所オープンセミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 ティム・インゴルド、石倉 敏明、今井 朋、白川 昌生、管 啓次郎、住友 文彦、高山 明、プブ・ド・ラ・マドレーヌ、山田創平ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 左右社	5. 総ページ数 224
3. 書名 表現の生態系	

1. 著者名 ロザリンド・E・クラウス他 / 著 林卓行 分担翻訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 896
3. 書名 ART SINCE 1900 図鑑 1900年以後の芸術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	林 卓行  (HAYASHI TAKAYUKI)  (00328022)	東京藝術大学・美術学部・准教授    (12606)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	住友 文彦  (SUMITOMO FUMIHIKO)  (20537295)	東京藝術大学・大学院国際芸術創造研究科・教授    (12606)	
研究分担者	丹治 嘉彦  (TANJI YOSHIHIKO)  (80242395)	新潟大学・人文社会科学系・教授    (13101)	
研究分担者	島津 京  (SHIMAZU MISATO)  (80401496)	専修大学・文学部・准教授    (32634)	
研究分担者	神野 真吾  (JINNO SHINGO)  (90431733)	千葉大学・教育学部・准教授    (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関